

都市近郊における緑地保全活動団体の継続及び活性化の要因について

○上田早織[東京農業大学造園学専攻博士前期課程1年] 麻生恵[東京農業大学]

キーワード：緑地保全 都市近郊緑地 継続性

1. 研究の目的

1980年代から市民の意向により公園愛護会を中心とした多くの緑地保全に関わる団体が設立された。それら緑地保全活動団体では、行政では担いきれない公園緑地の植栽や施設の整備等の管理、コミュニティ形成のためイベントを行い公園の骨格を作っていた。

本対象の町田市は都市近郊の多摩丘陵に位置し、貴重な植生や大規模な樹林地を保持しており、近年の緑地保全の社会的背景から緑地保全活動団体による維持管理の役割は重要視されている。

だが、活動発足時から年が経つにつれ団体は成熟の一途をたどっているように思えるが、今日、団体では資金面での負担、会員増加に伴い組織内での将来像の合意形成の複雑化、住民の要望に応じた緑地の敷地の拡大等の個々の事情により団体の役割は複雑化し活動の継続が困難な団体も存在している。

そこで本研究では町田市において、市民の貴重な緑地環境を将来に引き継ぐことを目的とした町田市条例の「緑地保全の森」制度による21団体を対象とし、緑地保全を行う団体の活動が継続していくための要因を明らかにして団体の継続性を測る指標を示し、各団体の継続から活性化へ繋がる主な要因を明らかにすることで継続活動における活性化の促進に役立てることを目的とする。

※ここでの活動の継続とは緑地保全活動団体の会員が満足に活動を続けている状態を示し、活性化とは発足当初からいる会員が継続の状態から活性化したものとみなした状態をいうことにする。

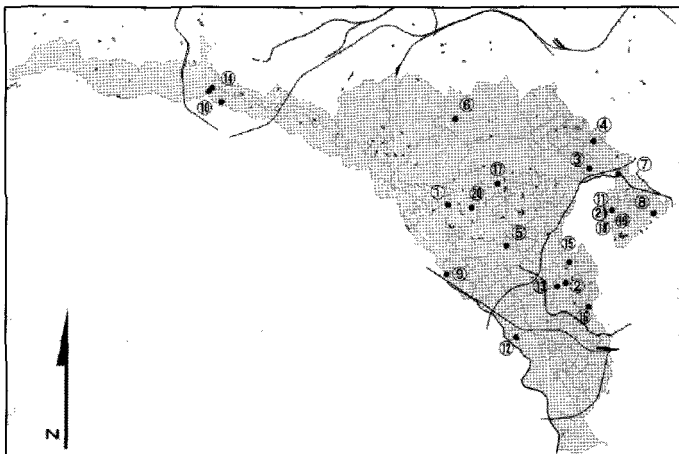


図-1. 町田市の緑地保全の森 位置図

表 - 1. 対象になる緑地保全活動団体と緑地設置・管理開始年月日

No.	緑地保全の森名称	緑地設置年月日	管理開始年月日	団 体 名
1	町田かたかごの森	1986.05.23	1992.04.01	町田かたかごの森を守る会
2	かしの木山緑地	1994.12.21	1995.04.01	かしの木山自然公園愛護会
3	能ヶ谷緑地	1986.12.23	1997.04.01	みつねくぼ緑地愛護会
4	能ヶ谷西緑地	1997.06.03	1998.04.01	能ヶ谷西緑地 樹の会
5	本町田恩田川緑地	1989.10.04	2000.04.01	町三小いなほ会
6	鎌倉街道小野路宿緑地	1987.10.23	2001.04.01	特定非営利活動法人「みどりのゆび」
7	三輪緑地(二本松下地区)	2001.10.01	2002.04.01	三輪みどりの会
8	三輪緑地(柳ヶ谷地区)	2001.10.01	2003.04.01	三輪みどりの会
9	境川森野緑地	2002.03.01	2002.04.01	境川森野緑地の会
10	相原坂下・橋本緑地	2003.02.01	2004.04.01	どんぐりの会
11	三輪緑地(東田谷東地区)	2001.10.01	2004.04.01	三輪住宅あおば倶楽部
12	金森峯山緑地	1995.04.01	2005.04.01	みどりのHATS
13	成瀬三ツ又緑地	1994.03.14	2005.04.01	成瀬三ツ又緑地の会
14	相原緑地	2004.04.01	2006.04.01	丸山谷戸山の会
15	成瀬山緑地	2004.02.05	2006.04.01	成瀬山の自然を守る会
16	成瀬山吹緑地	2001.10.01	2007.04.01	成瀬の自然を守る会
17	薬師池北緑地	1989.04.28	2007.04.01	薬師池北緑地を守る会
18	三輪新田谷戸緑地	2006.08.01	2008.04.01	けやき通り権緑地保全クラブ
19	三輪南谷緑地	2001.10.01	2008.04.01	三輪みどりの会
20	薬師池西緑地	1988.01.22	2009.04.01	薬師池西公園を考える
21	三輪緑地(東田谷戸地区)	1989.09.11	未定	三輪里山クラブ

2. 研究の視点と課題

昨年度に卒業制作で関わった町田市鶴川みつねくぼ緑地愛護会での経験をもとに各主体へ調査を行う。2010年5月から9月まで現地調査を行った緑地保全活動団体である町田かたかごの森を守る会、かしの木山自然公園愛護会、みつねくぼ緑地愛護会、能ヶ谷西緑地 樹の会、三輪みどりの会、三輪里山クラブ計6団体で得られた情報をカルテにまとめ、カルテから得られた情報を元に、団体会員の継続及び活性化に関わる満足度の指標における評価要素(説明変数)をKJ法にてグルーピングを行った。

評価要素の分類にあたり、人・組織・活動・空間の4つを大項目とし、さらに各大項目を中項目・小項目とし、全項目に対応する評価要素を列挙した(表一2)。

表 - 2. 団体の継続及び活性化の満足度に対する評価要素 (説明変数)

大項目	中項目	小項目	評価要素	
人	会員	活動参加者	キーパーソンに魅力がある キーパーソン 有識者がいる 活動を掛け持ちしている人がいる 団体発足から関わっている 土地所有者がいる 会員のうち活動参加者が多数いる 遠方からの参加者がいる 近隣住民が継続的に利用している 子供が多い	
		利用者		
組織	構成		50代以下の参加者がいる 世代が幅広い 近隣住民が会員の大半を占める 年長者が中心ではない	
	連携		行政との良好な連携がとれている 学習施設との良好な連携がとれている	
	役割	役割分担	適任の役割である 細かく分けすぎない	
活動	管理	植生管理・施設整備	植生管理に対して有識者がいる 参加者が10人以上である 女性の参加が比較的多い 男女で仕事を分けない 月2回以上、土日の作業が中心である 朝から夕方までの活動を行う 作業後に食事と一緒に行う 会員活動外でもイベントを開催している	
		企画	例年通りのプログラム 新規のプログラム	会員と周辺住民を対象にしている 会員と周辺住民を対象にしている
	運営	事務	広報 会計	会報の発行をしている 資金源の獲得している
		緑地外部	アクセス	住宅地と緑地が隣接している 幼稚園・小学校等が隣接している 大学が隣接している 緑地が隣接している 大規模な斜面緑地である 希少植物がある ヒオトープがある 畑がある 水田がある 野原がある 管理棟がある 広場がある トイレがある 水場がある
空間	緑地内部	自然		
		人工		

そこで研究の目的を明らかにするため、以下の課題を設定する。

- ① 町田市における緑地保全活動団体の管理区域の現況把握
- ② 緑地保全活動団体の管理実態の把握
- ③ 緑地保全活動団体の活動を継続していくための活動評価要素の抽出
- ④ 各緑地保全活動団体と活動評価要素を照合し活性化の度合いを評価
- ⑤ 継続又は継続から活性化している団体とそうではない団体等の場合分けを行い比較
- ⑥ 仮説との検証

3. 研究の方法

1) 行政・緑地保全活動団体・土地所有者の管理運営実態の把握

町田市公園緑地課に対しては各緑地保全活動団体の管理区域の位置情報・緑地の所有形態などの基礎的な資料の入手や、各団体の活動状況・空間などの各団体の特性についてヒアリングを行う。緑地保全活動団体に対しては団体の活動日に共に活動しながら行った参加型調査の際にヒアリングを行う。さらに、活動の記録が記してある会報や議事録、記念誌を入手する。土地所有者に対しては町田市公園緑地課へ発足当初と現在の土地所有形態等をヒアリングする。上記の情報をカルテにし整理する。

2) 立地状況の把握

緑地の規模や形態と福祉施設・学習施設・住宅による周辺施設といった緑地内部と緑地外部との関係を GIS にて図示化する。

3) 活動評価軸の作成

緑地保全活動団体の活動を継続から活性化に繋げるための活動評価要素を抽出するため、活動参加者へプレヒアリングを行う。活動参加者の継続や活性化に関わる満足度を図るためにアンケートを配布する。

4. 予想される結果

空間特性を分類すると里山的要素の強い場所と都市的要素の強い場所に分類できる。里山的要素の強い団体では緑地を生かした自然型のプログラムが生まれ樹林地の管理が複雑になる。そのため、植物などの専門的知識のある物がキーパーソンとして重要になる。都市的要素の強い団体では空間的魅力に乏しく新規プログラムの作成などの運営面で魅力を高めていく必要がある。よって、会員の間でのコミュニケーション力が求められることがわかる。

また、緑地の規模や形態と福祉施設・学習施設・住宅による周辺施設といった緑地内部と緑地外部の空間特性の関係によって緑地の管理や運営方法が決まり、活動組織に必要なキーパーソンは決まることが予想される。

そして、土地への愛着のある土地所有者や発足当初からの関係者の関わりが密なほど、活動の運営が円滑に進むことも継続及び活性化に繋がる要素であると予想される。

以上にとどまらず、他項目の重みづけが明らかになるとと思われる。

5. 今後の予定

今後未調査の 15 団体を調査し全 21 団体を整理して満足度の要因を挙げたのち、評価要素を抽出し、各主体の実態調査では得られない情報をアンケート項目とすることで活動評価要素を得る。

参考文献

- 1) 川喜田二郎 (1967) : 発想法 : 中央公論社
- 2) 岡本桂子 (2008) : 緑の市民活動団体の活動性成熟要因に関する研究 : 東京農業大学修士論文
- 3) 今井健 (2008) : 多摩丘陵地域における公園・緑地の空間特性と市民による管理・運営組織の機能についての研究 : 東京農業大学修士論文